

わし方である。

「花はかぎりこそあれ、そゝけたる薬などもまじるかし。人の御かたちのよきはたとへむかたなきものなりけり一八野分」との一文は、玉鬘の美容を花に譬えたものであるが園芸家・植物学者等その道の専門家は別として、花の美を薬まで調べ、これこそ完全美の花とこのように断ずる人が幾人あろうか、また、筆を執る程の人にしても、花の美をかくまで詳しく書き表わし得る人があろうか。

作者は植物に詳しい。且つ、叡智を以て鋭く観察し、巧みな筆によつて、植物を物語中に活躍させている。前記、薬の観察と使用の如きは、その極致といえよう。

○ むすび

源氏物語が固文学史上でも、また、世界文学上でも誇るべき不朽の一大ロマンであることは、私が今更諫々するまでもないが、以上は植物に関する面からみた源氏物語である。

豊富な知識と鋭い観察力の所持者である作者は、巧みな筆致で物語を書いた。植物の面においてもまた然りで、物いわぬ植物も、物語中の恋の成行に、人と人との葛藤に、人物の栄枯盛衰に色どりと潤いとを与えている。

源氏物語は、一千年もの昔に書かれた。しかし、今日我々がこれを読む時、旧新の用語の相違というハンディキヤ

ップがありながらも、なお今日に草せられたかのような新鮮な感じを抱くのは、物語中に織りなされる人と植物の深いつながりや密接な融け合いがその一役を買っているからであらう。

作者紫式部は、源氏物語中に、実に巧みに植物を使っている。幾多の物語中でも、源氏物語程登場植物がその効果を挙げているものはないのではなからうか。

「金閣寺」に表われた美

山本弘美

(一)

『金閣寺』は昭和三十一年一月から十月まで、『新潮』に連載された三島三十一才の時の長編小説である。これは昭和二十五年七月二日早朝に起つた金閣寺放火事件が、素材となつている。作者と小林秀雄氏との対談によると、作者は事件の詳細や犯人である青年僧の経歴などを綿密に調査していることが分る。事実、主人公に与えられている条

いたが、少年には未だ実感として戦争が身近になかったのである。しかし、夏休みが終つて、工場へ勤勞奉仕に行くことになる、半日でも金閣の傍を離れることになる。

それが彼を不安にし、自分の留守中に「金閣は空襲で焼かれていくかもしれない。」と思うようになる。

不動不滅の美の建築である金閣が、「灰になる」「生」たることを意味する。即ち、金剛不壞の金閣と少年とは、同じ「生」を生きているという考えに達する。この考えは少年を虜にし、遠い世界での出来事のように思えた空襲も、今や彼と金閣にとつては、同じ危難となつたのである。そして、「いわば現象界のはかなさの象徴に化し、「唯の生物に過ぎなくなつた金閣は、少年をはるかに超越していた位から急激に下降し、接近して来たのである。

「同じ禍い、同じ不吉な火の運命の下で、金閣と私の住む世界は同一の次元に属することになつた。」とそう思うと、その金閣の悲劇的な美しさは一層増し、少年を喜ばせたと同時に、彼が愛する美しい金閣とこの醜い肉体の持主の彼とが、同じ「火」によつて、焼き亡ぼされることも可能だ、つまり空襲によつて、彼は金閣（美）と心中が出来るといふこと。美と生死を共にすることが出来るといふ考えが、殆ど彼を酔わせたのである。この考えが、最後の行為（金閣寺焼亡）にまで根強くもたらされたものと思

われる。この時から現実の金閣は、心象の金閣に劣らず美しいものとなり、同次元に住むことによつて金閣は主人公を受け入れたと言える。

同一次元にある今、金閣と生死を共に出来たら……と、彼にとつては戦争が勝とうと負けようと、そんなことはどうでもよかつたのである。彼はただ「生まれ変りたかつた」のだ。それは金閣の偉大な美に対して、自分があまりに醜なる故か。それもあろうが、美に疎外される自分に恐怖を抱いていたとも言える。「私は何ものが私を殺してくれるのを待つていた。ところがそれは、何ものが私を生かしてくれるのを待つているのと同じことなのである。」と、主人公は京都の空襲を待ち望みだした。

しかし、戦争はそれから間もなく負け戦となり終つた。（主人公十六才の夏敗戦が彼に意味したものは、「絶望の体験に他ならなかつた。」のは言うまでもないが、「断じて解放ではなかつた。不変なもの、永遠なもの（金閣がそこに未来永劫存在するということを語っている永遠）、日常のなかに融け込んでいる仏教的な時間の復活に他ならなかつた。」のである。

この考えは、三島の告白小説と一般に言われ、また本多秋五氏に「ここまであからさまに真実を書いてよいか、と思うほど赤裸々に真実が語られている。」とまで言われる小説、『仮面の告白』においても見ることが出来る。

英文で書かれた敗戦の降伏宣伝を読んでは、「私（作者三島は終戦の年二十才）は思う。「それは敗戦という事実ではなかつた。私にとつて、ただ私にとつて、怖い日々がはじまるといふ事実だつた。その名をきくだけで私を身ぶるいさせる。しかもそれが決して訪れないといふ風に私自身をだましつづけてきた、あの人間の『日常生活』が、もはや否応なしに私にも明日からはじまるといふ事実だつた。」と、『金閣寺』の場合と全く同じような考えを述べている。

案の定、『金閣寺』においても、日常生活の復活と同時に、同次元に住んで居た金閣の美も蘇り、「私」の醜を足蹴にして再び金閣は、手の届かぬ以前よりもはるかに超越した永遠に戻つてしまつたのである。——未来永劫、不朽不滅の美に。——そして彼は「比類なく小さい醜い虫のようになつて」しまつた。

空襲によつて生まれ変わるこの出来なかつた少年は、自分自身で「新しき時代」を作らねばならない。工場の指導者であつた士官は、公然と、闇屋になることを宣言し、トラツク一杯の物資を自分の家へ持ち帰つた。豪胆で残酷な鋭い目をした士官が、少年の目の前で悪へ向つて、駆け出すのを見ながら、少年はこの世の中が敗戦のため騒然とし、混乱している時にどう生まれ変わるべきか考えねばならなかつた。彼の吃りから生まれた暗い性格からして、自ら言

う「新しき時代」への光明は、あまり期待できない。「世間の人たちが、生活と行動で悪を味ううなら、私は内界の悪にできるだけ深く沈んでやるう、」と思う。手はじめに「老師（金閣寺住職）に巧くとり入つて、いつか金閣を手に入れよう。」また「老師を毒殺して、そのあとに私が居据る」という一見他愛ないもののように思えるが、彼の「内界の悪」の芽生えとして、あるいは金閣（美）へ対する執着からしてみると、一種の底知れぬ無気味さを感じさせられるのである。

眠れぬ夜、不動山に登り、彼は京都の灯を見ながら、「戦争がおわつて、この灯の下で、人々は邪悪な考えにかかれてゐる。（中略）この無数の灯が、悉く邪まな灯だと思つと、私の心は慰められる。どうぞわが心の中の邪悪が、繁殖し、無数に殖え、きらめきを放つて、この目の前のおびただしい灯と、ひとつひとつ照応を保ちますように！」と考える。これは作者自身の敗戦に対する反発かもしれないが、終戦前、主人公が空襲を夢みていた時、「美ということだけを思いつめると、人間はこの世で最も暗黒な思想にしろしらずしらずぶつかるのである。」と言つてゐる。後者は純粹な愛情の結果、同一危難である空襲によつて、金閣と共に滅することを夢みていたので、未だ「悪」の思想は芽生えていなかつた。しかし、敗戦後の今、京都の灯を見つめながら、「私の心の暗黒が……」と言ふ時、すでに

「私は内界の悪にできるだけ深く沈んでやろう」と決心した後でもあるので、「悪」の芽生えが十分に感じられる。金閣への愛を保つためには、今や金閣を確実に自分のものにするより他に方法はないのである。即ち「私の心の暗黒が……夜の暗黒と等しくなりましますように」という「夜の暗黒」は、万物を包み隠し、万物を支配するものとして認識されているものである。

(三) 道徳上における「美と悪」の問題

この作品で私が疑問に感じたことは、道徳性の皆無ということだつた。主人公を仏に仕えさせながら、作者はその宗教的モラルをも表現していない。これは作者が意図した回避ではなからうか。

實在の放火事件を素材としたこの作品が、免れ得ない問題は、放火事件そのものが持つ非人間的な反社会性であるはずである。昭和二十五年当時の新聞を調べると、事実この事件が報道された時、世間は愕然とし犯人を非難し、同情する者などいなかつたようだ。中村光夫氏は「彼（放火犯）を小説の主人公に選ぶことは彼の行為の反社会性を作者がそのまま背負いこむこと」になる、と言つておられる。

では何故三島は非人間的な犯人を主人公に選んだのか。新聞ではこの事件の犯人は「分裂型の男？」と、東大教授

談を載せていた。「『分裂型』の犯罪の特徴は、動機がはつきりしないのにその犯罪が極めて冷酷である。」というのだ。

この冷酷さは道徳性のないことを意味するのではない。三島の他の作品、例えば『獅子』や『愛の渴き』の主人公たちによつても代表されるもので、あの残忍刻薄な主人公は『金閣寺』の主人公にも通ずるところがある。これは、奥野健男氏が言われるように、三島が敗戦によつて「良心と呼ばれている超自我の消滅」を経験したということからすれば、考えられないことでもない。

これが「三島の仕事全体の底流にあるもので、彼にとつては『生活とは……或る残酷な是認の決心』であり『人生は見事に前提と目的を除去された形で現前する』ものである。そこに、彼にあつては、道徳の空位をみたすものは、美のみ、という事情があるらしい。」と本多秋五氏は言つておられるが、『金閣寺』において主人公の道徳性が描かれていないことは、奥野氏が言われる三島における「良心と呼ばれている超自我の消滅」の精神が意図したものであつて、本多氏の言われる「道徳の空位をみたすもの」が、「金閣の美」ということになるのだ。「悪徳の誇示」とまでは行かないが、作者は主人公に「悪は可能か」という警句を吐かせることで、道徳に対する作者自身の抵抗を表わしているように私には思われる。つまり私の考えは、道徳性

の皆無は「悪行」を呼び、また同時に、道徳性の空位は「美」によつてみたまされる。即ち、道徳性の空位は「美」と「悪」によつてみたまされ、これらの交会において生じる現象が、三島文学の根本ではないかということだ。

四 三島芸術の根本思想

ほとんど回避と見られる道徳性の問題、この道徳性の空位に入り込むとする悪、そして美、これを生んだ登場人物の異形。これは『金閣寺』のみならず、『仮面の告白』『愛の渴ぎ』『青の時代』そして最近作の『美しい星』に至る一連の三島の歩んで来た思想過程であるかもしれない。主人公たちの戦争に対する異常さ、美と愛に対する妄念、その根底に息づく「悪行」。すべてに共通する道徳観の問題、主人公たちの冷淡や残忍さ。またそれらの異常、異形であること。

この三島の根本思想を奥野氏は次のように言つておられる。三島の「人間形成期であつた二十歳前後の青春をまるごとのみこんだ、戦争と敗戦の体験によつて得たものである。戦争期、三島は自己のすべてを賭け、現実への密着と思想による抽象を繰返しながら、戦争とは何か、人間とは何か世界とは何か、美とは、人生とは、死とは何かを終末の目で問ひ続けた。彼は戦争の圧縮状況の中で、現実とは何であるかを知つた。そして敗戦は一切の秩序の解体であり、

人生の終末であり、世界崩壊であり、内部世界の、超自我の消滅であることを体験した。」「ここに彼はこの世にあり得ぬ究極の美とロマンを、人間のはかなさ」を、そしてそこから生まれる人間の残忍刻薄なアンチ、ヒューマニズムが、敗戦の「孤独な密室ではぐくまれ、次第に抽象的普遍的な思想に転化されて行つた。」「この根本思想はつまり「自己の芸術の精とならない現実を強引に捨象し、美だけを、芸術的関心事だけを切り抜こうとする。」「それは現実から剝離である。」「現実への出口を失なつた作者の思想は、表現に逆流し、美の中に思想を塗りこめる。その思想は文学作品という架空の表現世界によつてのみ検証され、きたえられ」て来たのだと。

こういう三島の芸術が意図するところに『金閣寺』のあらゆる問題性は生まれたものと思われる。そして三島は、『金閣寺』において自己独自の世界をつくりあげ、思想を完結させ、そして自ら焼き払うことによつて、無上の美を表現した。」のである。(紙面の都合で論文前半のみ要約した。)